

ダンス創作能力と創造性について

—動きや並び方の表現を中心に—

埼玉女子短期大学 佐藤節子

1. 目的

筆者は、ダンスを専門としない一般学生に提供するダンス授業のあり方を模索し、創作ダンスの教育的意義の一つに創造性の陶冶があることを見出した¹。また、エアロビックダンスの体験と比較すると、創作ダンスの体験後は、思考の速さ得点や思考の独自さ得点の向上が著しかった²。この結果から独創的思考能力とダンス創作能力の関係に着目し、「一般学生がグループでダンスを創作する際に、独創的思考能力得点平均値が高いグループは、表現する動きや並び方の独創性が高いのではないか」という仮説をたて、次の二つの結論を見出すことができた³。

第一に、独創的思考能力得点平均値が高いグループは独創的な並び方を表現する能力が高いが、独創的な動きを表現する能力が高いとは限らない。第二に、独創的思考能力得点平均値が低いグループも印象に残る表現をする。

本研究の目的は、この二つの結論を検証することにある。

2. 方法

(1) 実施対象と時期

対象は健康・運動科学実習を受講する女子大学1年生67名で、創作ダンス実施期間は2000年9月～10月である。

(2) 実施内容

週1回90分の授業を4回行った。1回目はグループ分けと創作活動、2回目は創作活動、3回目は創作活動と発表、4回目に発表撮影ビデオの鑑賞と創造性検査を行った。

創造性検査は、東京心理発行のS-A創造性検査A版を使用した。

(3) 分析方法

各グループの表現した並び方と動きの得点化は、S-A創造性検査の四つの思考特性の評価点算出法を参考にし、論者が考案した。

動きと並び方の得点と創造性得点の関係を示す情報を圧縮する試みを行うため、主成分分析を行った。データは16評価項目×8グループとなり、相関行列、共通性算出後、固有値1以上の4成分を抽出し、成分行列を算出した。また、主成分得点の計算は回帰法を使用した。統計ソフトはSPSSを使用した。

3. 結果と考察

固有値1以上の4主成分の負荷量の内、 ± 0.68

以上の項目から、第一主成分を「創造性」、第二主成分を「動きの数・深さ・広さ並び方の広さと数」、第三主成分を「並び方の深さー動きの独自さ」、第四主成分を「並び方の独自さ」と命名した。思考の独自さ得点の高いグループは他の創造性の項目においても高得点を示したため、独創性は独立した軸ではなく、創造性の軸として抽出された。

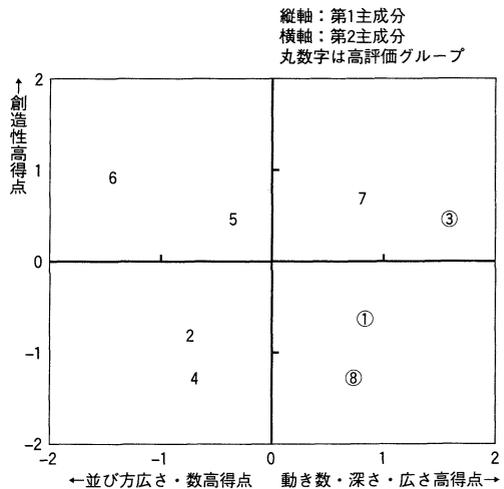
図1は第一、二主成分を軸とした各グループの主成分得点散布図である。

図1の上方に分布する創造性高得点グループの内、5、7番は第三主成分の動きの独自さ軸において、3、6、7番は第四主成分の並び方の独自さ軸において高得点を示した。しかしながら、創造性低得点の4、8番も動きの独自さ軸や並び方の独自さ軸において高得点を示した。したがって、結論の第一は本研究では次のように訂正される。

創造性得点平均値が高いグループは独創的な動きや並び方を表現する能力が高いが、創造性得点平均値が低くとも独創的な動きや並び方を表現することがある。

また、図1の丸数字のグループは、筆者の評価や学生のアンケートで好印象だったが、創造性低得点の1、8番が含まれた。したがって、結論の第二は本研究でも採択される。

図1 主成分得点散布図



¹佐藤節子「創作ダンス教育における創造性開発について」埼玉女子短期大学紀要第7号 75-92 1996。

²佐藤節子「ダンスの体験が創造性へ及ぼす影響について」埼玉女子短期大学紀要第10号 73-89 1999。

³佐藤節子「創作ダンスの独創的身体表現能力と独創的思考能力の関係について」埼玉女子短期大学紀要第11号 22-44 2000。